

吉田宗恂とその周辺—コンピュータと図書館を活用して

(5) 早大所蔵の医方大成論抄

島野達雄

1. 医方集成と医方大成

吉田宗恂（永禄元年（1558）－慶長 15 年（1610））があらわした『医方大成論抄』は、元・孫允賢が延祐（1314-1320）中に撰した医方集成に明・彦明公が各種の処方を追加した医方大成の字句を、こと細かに注釈・解説したもの。その後、彦明公の子孫である明・熊宗立が医方大成をさらに増補し、医書大全を撰んだ。

孫允賢『南北経験医方集成』10 巻は、主に宋の陳言（陳無擇）の三因極一病証方論 18 巻、宋の嚴用和の濟生方 8 巻に記された病症と処方にもとづいている。

彦明公『南北経験医方大成』は、「風」から「疹痘」までの 72 論からなり、男女・老若・季節などに応じた病因・病症と、それに対する効果的な処方を紹介している。（参照：6. 医方大成論の序文と目録）

早稲田大学の古典籍総合データベースや国会図書館のデジタル資料で、漢籍および和刻本の『医方大成（論）』や岡本一抱（為竹）の『医方大成論和語鈔』の画像は閲覧できる。

2. 医方大成論抄の検索

吉田宗恂『南北経験医方大成論抄』5 巻 2 冊は、早大の古典籍総合データベースで閲覧できる。他に東北大学野文庫と杏雨書屋（乾々）が所蔵し、東大（国語）に元和 2 年の写本があるが、2018 年 2 月現在オンラインでは読めない。

京大の貴重資料デジタルアーカイブは、2017 年 12 月より自由に閲覧できるようになった。うち近衛文庫（もと陽明文庫）の医方大成論抄・上下巻は、無刊記、著編者名のない古活字版。注解の文章は早大本より極端に短い。早大本と項目がほぼ一致しており、宗恂の著作のように思える。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると、この本は、京大以外に杏雨と陽明文庫（京大の近衛文庫とは別）が所蔵している。この国文研のデータベースは国書総目録をもとにしているため、大阪名家著述目録に採録されているだけで現物が見当たらない北山寿安の医方大成論抄もヒットする。

この他、就安斎玄幽注・正保 4 年（1647）/慶安 2 年（1649）/万治 3 年（1660）版の医方大成論抄を九大、大阪府立中之島の石崎文庫、京大谷村文庫などが所蔵している。

3. 吉田宗恂『医方大成論抄』（早稲田大蔵）

早大所蔵の宗恂の『医方大成論抄』は、宗恂没して 22 年後の寛永 9 年（1632）の刊記をもつ整版本。漢文体（「也」体）の「抄物」のひとつ。漢字の反切（発音）や字句の意味を細かく解説している。

下巻巻末に、「学者講此書尚矣。説々不同、故其可否難弁者多矣。予雖不敏、取其長棄其短、又去其世人能者之事多以新意注。此書善抄出之本意為視於初心也。省則以愚狹臆、而無示人猶以管窺天乎。時天正乙亥孟冬良日 意庵宗恂」という天正3年(1575)宗恂18歳のときの跋がある。

この跋文は、大日本史料12編の7に記された宗恂の『本草序例抄(寛永18年本)』天正14年、宗恂29歳のときの跋を想起させる。(この跋文のある本草序例抄は、所在を目下探索中。)

本文の宗恂の注解の上部には細字で頭書(頭注)がある。

[医方大成論抄の本文]

南北経験医方大成鈔卷一 意安宗恂解

此の書は始め孫允賢が著すところなり。允賢は文江の太守たり。元の仁宗に仕う。仁宗は元朝十四主、第八主目なり。諡(おくりな)して曰く、聖文欽孝皇帝と。癸丑に即位、明年甲寅、元の皇慶を改め、延祐と号す。日本後醍醐元応(1319-1320)の比(ころ)なり。熊宗立・医学源流(医書大全の巻頭の章)に曰く、「孫允賢は文江人なり。元の仁宗延祐中に医方集成を選す。予(熊宗立)が先祖彦明公、復(また)宣明拔粹等の方を選して、之を附益して是を医方大成と謂う」。

[頭書]

立云、延祐元年(1314)は、当に日本正和三年(1314)なるべし。天正四十一(1613年。天正五年(1577)の誤りか)に至ること凡そ二百六十三年なり。

4. 頭書にあらわれる人名

うへの「立云」は、おそらく秦宗巴(1550-1607。号は立安)であろう。「立云」は立曰の7例を含めて頭書全体で58例あらわれる。本文の分注にも、「立云」が9例、「立曰」が5例ある。

同様に頭書の「養云(養按5例を含む=以下略)」は59例もあり、養安院・曲直瀬正琳(1565-1611)であろう。第3巻頭書には「琳云」が2例ある。本文分注の「養云」は2例。

「啓云(啓曰1例)」は34例あり、啓迪院・岡本玄治(1587-1645)と思われる。

「栢云(栢説)」は21例(ほかに「一云」が1例)。谷野一栢(?-?)であろう。

曲直瀬道三玄朔(1549-1632。号は東井)の「東井翁曰(東井翁云4例)」は13例。

宗恂の師にあたる曲直瀬道三一溪(1507-1595)と思われる「師云」が7例ある。

また宗恂の『本草序例抄』天正14年跋(大日本史料12-7)およびその巻3、巻4に各2回あらわれる建仁寺の月舟寿桂(1470-1533)の名が、巻2に1度だけ登場する。

ほかに「徳云」7例(秦宗巴の字は徳岩、曲直瀬正琳の父は徳安、永田徳本の可能性も)「嚴云」3例(宋・嚴用和か)、「良云」10例(明・董宿の奇効良方か)も登場する。

また、巻1の前のほうに「愚謂えらく畢竟大補なりと云う心ぞ」、「愚按ずるに易注に甲は制を創たるの令なり云々」とあり、宗恂自身もこの頭書を記したと考えられる。

すなわち、頭書からは、「宗恂や玄朔のほか、秦宗巴や曲直瀬正琳、岡本玄治、一栢を含む、医方大

成論および曲直瀬道三一溪や巖用和らの著作を研究するサークルが、本書刊行の寛永 9 年以前に存在した」ことが推定できる。本書に先行して刊行されたと思える京大近衛文庫の医方大成論抄（古活字版）を詳細に検討すれば、より鮮明に当時の医学界の様子がわかるであろう。

なお、巻 4 の本文に「導道」という名があらわれ、後筆で「道三の師也」と書き込みがある。導道は道三一溪の師、田代三喜の名である。

5. 今後の見通し

現在、彦明公の医方大成論（読み下し約 4 万字）、宗恂の医方大成論抄の本文（読み下し約 10 万字）は、ほぼすべてパソコンに入力した（巻 5 産後の「菌の字、一本に菌に作る」の菌は文字鏡にはあるが、ユニコードにはない）。

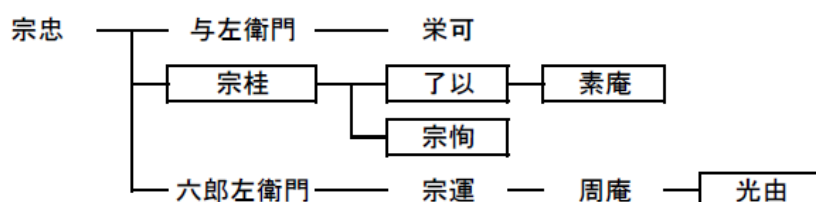
医方大成論抄の頭書部分は、全体の三分の一の入力を済ませている（「〇〇云」などは先に入力済み）。巻 1「風」の「精神恍惚」の頭書には、

栢説素問卷の一、靈蘭和典論八に恍惚の数毫厘に生ず。注云、恍惚は謂る無有るに似たり。忽亦数なり。無に似て有に似て毫厘の数、其中に生ず。老子曰く恍々惚々其中物有り。此れの謂なり。算書曰く有るに似て無に似るを忽となす云々

という興味深い記述がある。「似有似無為忽」とする「算書」はわからない。

今後、現存する宗恂の三つの著作、すなわち『歴代名医伝略』『医方大成論抄』『本草序例抄』を詳細に研究すれば、安土桃山時代から江戸初期にかけての医学界の系譜・交友のほか、当時の医師が持っていた暦学や数学の知識がより明らかになるであろう。

宗恂の経歴について、寛永諸家系図伝には「父の業を継て、姓名を知らる」、寛政重修諸家譜には「父が遺跡をよびその業を継で名を知らる」とある。角倉了以や素庵には、このような記述は残っていない。想像をたくましくすれば、吉田光由の塵劫記が洛陽の紙価を高めたのは、吉田宗恂の名声があったからではないだろうか。



6. 医方大成論の序文と目録 (寛永6年/貞享5年版は国会, 享保7年版は早大=下記)

南北經驗医方大成

医家者流所蓄方書何啻數十家然用可否中蒙収効甚寡盧陵孫氏為世良医每閱諸方必取其常用功要者名曰医方大成意使今之医者雖行万里不必挾他医書而治病之要瞭然尽目其於衛生之心豈小補哉乎

予嘗謂人生一身六氣所千七情所感不能無疾頼前賢辨脈論証處方施治然後養生者得以自衛厥功大矣非如地理之術相命之書可以富貴禍福告人而求其驗否每未即見性医之得効神速近足自衛遠可濟人諸芸之中當以為甲昔人以與良相並言蓋有以也今之学医固不能神聖而工巧政自罕見余雖非專学每觀其書所謂脈証治因不過以五行之造化合一身之理得其理則脈証俱在是矣因攷諸書所載之方今人所用者無幾而其中固有老医所未嘗試者况於常人蓄方者乎又况良方非一書所能盡載而諸書人非常人所能盡蓄文江孫氏集諸方取功要者各以類編名為大成各類之首又取三因及嚴氏諸家之說合而為論庶觀者得其說而求其方瞭然在目矣編成求序鉅梓以広其傳使閱方者一覽而盡得之可省蓄方之繁而行遠者又可挾以自便或可為衛生之一助云

皆辛酉至治初元文江王元福序

重刊医方大成論目録

風	一	寒	二	暑	三	湿	四
傷寒	五	瘧	六	痢	七	嘔吐	八
泄瀉	九	霍乱	十	秘結	十一	咳嗽	十二
痰氣	十三	喘急	十四	氣	十五	脾胃	十六
翻胃	十七	諸虚	十八	癆瘵	十九	咳逆	二十
頭痛	二十一	心痛	二十二	眩暈	二十三	腰脇痛	二十四
脚氣	二十五	五痺	二十六	五疽	二十七	虫毒	二十八
諸淋	二十九	消渴	三十	赤白濁	三十一	水腫	三十二
脹滿	三十三	積聚	三十四	宿食	三十五	自汗	三十六
虚煩	三十七	健忘	三十八	癩癩	三十九	陰癩	四十
癩冷	四十一	積熱	四十二	吐血	四十三	下血	四十四
痔漏	四十五	脱肛	四十六	遺尿失禁	四十七		
咽喉	四十八	眼目	四十九	耳	五十	鼻	五十一
口唇	五十二	牙齒	五十三	舌	五十四		
五藏内外所因証治			五十五			癰疽瘡癤	五十六
瘡疥	五十七	癩癧	五十八	折傷	五十九	急救諸方	六十
婦人	六十一	孕育	六十二	胎前	六十三	産後	六十四
小兒	六十五	臍風撮口	六十六	口瘡重舌	六十七	夜啼客忤	六十八
急慢驚風	六十九	胎熱胎寒	附盤腸		七十	感冒四氣	七十一
疹痘	七十二						

目録畢